

ヴァイオリニストTAIRIKUの戯言

〔第7回〕

『弦が揺れると、僕は季節の風になる』

+ 文 佐田大陸 Text by Tairiku Sada +

MIZUTANI TAIRIKU

先日、東京交響楽団のコンサートマスターの水谷晃さんとヴァイオリニスト2人だけ（僕はたまにピオラ）のコンサートを、サントリーホールのレストランで行いました。

（この公演は美楽さんにスポンサーになっていただきました。無事に終えることができましたので、この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございます！）

水谷さんは大学時代の同期で（水谷さんなんて呼んだことないので以後見：にしたいところだが、文章で呼び捨てると偉そうなのでやっぱり水谷さん）彼とはずっと一緒に音楽をしています。

学校を卒業すると、僕はヴァイオリンのKENTA、ピアノのSUGURUと共にTSUKEMENを結成しました。クラシックをベースに、今はオリジナル曲をメインに様々なジャンルの曲を演奏するユニットです。

かたや彼は王道クラシックの道で着実に実力を身につけ、今や一流のオーケストラのコンサートマスターになりました。

昨年僕が自主で企画したコンサートに彼は参加してくれたのですが、それ

を観たキングレコードのプロデューサーが「是非CDを出したい」と言ってくれたのが今に至るきっかけです。

ただただ楽しくやっていただけの学生時代、別々の道を歩んだ2人が今度はプロとして、10年越しにCDを一緒にリリースするとは夢にも思っていま

せんでした。仕事で採めたら嫌だから、親友とだけは一緒に仕事をしたくないと思っていました。

しかし振り返ってみると、高校時代ずっと一緒にいたのがKENTAで、大学1、2年が水谷さん、3、4年がSUGURU……。やれやれ（笑）

今回の公演はほぼクラシックで構成しました。クラシックという、一生をかけてもおそらく満足することはない奥深い世界。そこに自分の人生を全て投じていく。それってとても尊い生き方だなどと思うと同時に、クラシック音楽のマーケットの規模がどんどん縮小していることに対する無念。

衝撃だったのは、クラシック離れは日本にも増して本場のドイツでも深刻だと、以前ドイツに行った時の通訳さんが言っていました。

自分がそこをベースに学んできた

いうことでもあります。ほとんどの音楽の原点でもあり、何百年にもわたって続いてきた音楽の衰退はあまりに悲しいものがあります。

ただ現在は音楽だけでなく様々な「伝統」のあり方が問われる世の中になつていていると思います。

必ずしも本質的に優れたものだけが認められるわけでは無いこの時代に、自分はいつどこに誰と何を投じて、そして何を感じて生きていくのか。

「MIZUTANI TAIRIKU」をやった事で、今年結成10年目を迎えるTSUKEMENのあり方、今後の自分自身の人生について考えさせられた今年のスタートでした。



profile

2010年3月に桐朋学園大学音楽学部大学院を修了。
2ヴァイオリンとピアノのアンサンブル・ユニット「TSUKEMEN」のヴァイオリニストリーダー。
2010年キングレコードからメジャーデビュー。
結成9年目にして450本以上の公演を海外や日本全国各地で開催、現在までにのべ35万人を動員している。